

中高年の心的世界を探る

—世代間の比較を通して—

高橋 かほる

要旨

近年、生涯発達心理学や医療、介護の領域に携わる人々によって、中高年の性格特性や、心理的特徴が実証的に研究されるようになってきている（若本, 2007）。筆者は以前より幼児を対象に具象画ないし抽象画を呈示し、「お話作り」を求める研究を通して言語の発達や心理の把握に努めてきた。今回、同様の手法で中高年の心理的特性を探ってみた。「お話作り」の一環として中高年と青年世代である学生を対象に4枚の抽象画を呈示した。その上で、それぞれの絵の印象を12対の形容詞からなるSD尺度上での評定として求め、さらに得点化した。結果として、呈示された各絵刺激に両者とも基本的には似ている印象をもったが、因子分析の結果をふまえると学生群の方が絵刺激から醸し出される印象や躍動感などに、より敏感に反応を示している。このような感受性は、青年の特徴を示しているとも思われる。他方、好悪や快不快といった原初的な情動や感情に結び付く印象に対しては学生・中高年ともあまり違いが認められなかった。学生群は絵の持つ雰囲気からくる表面的ともいえる情緒性に敏感であるが、一方、加齢という要因が中高年の絵に対する感受性に変化を与えているとも解釈できる。今後の研究として、呈示する絵の作者や絵の内容を変えることを試みるにより、学生・中高年の反応の変化を今回の結果との差異において確認し考察したい。また今回の調査対象を成人女子に限定したことから、今後、成人男子を対象としての結果を得て、性差の比較についても考察し研究をする必要があると考えている。

1. はじめに

ひとの言動や考え方に関して、子どもらしいとか若者らしいといった表現のなされることがある。そのような意味で「中高年らしい」という時にはどのようなことを意味するのであろうか。近年の経済的不況や想定外の災害に見舞われる世相の中で、従来とは状況に変化が見られるとはい

え、若い世代が未来に対しての夢を持ち、明るく人生を生きているのに比して、中高年は人生の先も見える中で趣味への志向など内向きの心理状態になりやすく、考え方にも柔軟性がなくなる（若本, 2010）の物事への関心の向け方の相違の研究報告もなされている。近年、生涯発達心理学や医療、介護の領域に携わる人々たちによって、中高年の性格特性や、心理的特徴が実証的に研究されるようになってきている。榎本（2006）は加齢にともなう性格の変化について、ある個人が一生を通じて保持するその人らしさと、子どもらしさ、青年らしさ、中年らしさといった同年代の人々に広く共通して見られる特性が絡み合ってその時々の人らしさ（その人らしい性格特性）が形成されると述べている。

筆者は以前より幼児を対象に複数の絵（具象画・抽象画）を呈示し、「お話作り」を求める研究を通して、幼児の言葉の発達や心理の把握に努めてきた。今回「お話作り」という一種の投影法的な手法により、中高年の心理的傾向や中高年らしさにアプローチし、中高年の自己実現のサポートに役立てたいと考えた。なお「中高年」という言葉を使用する場合は、人として人生の後半にさしかかる「中年」以降と「老年」の世代を統一的に表す概念として使用している。

2. 方法

(1) 調査対象者

- ①某大学の教養講座に通っている50歳代～70歳代までの中高年女性61名。平均年齢は60.3歳（SD 8.1）である。
- ②中高年との比較のため、某大学児童学科3年の女子学生61名を青年期の世代として調査対象とした。平均年齢は21.3歳（SD 0.29）である。

(2) 呈示する絵刺激

対象者に呈示する絵刺激は高橋（2011）が幼児を対象と

する研究に用いたもので、絵本「もこもこ（文研出版）」から選んだ4場面の抽象画である。絵本は谷川俊太郎・元永定正の作で、元永は一般に抽象画家として知られている。抽象画とは「何が書かれているのかわからない絵画（岡田・井上、1991）のことであるが、呈示する絵は基底線があるなど具象画的傾向をもつ抽象画と言える。岡田・井上（前出）は、抽象絵画の研究において多くの作者の中でもカンディンスキー（1866）は、抽象画であるにもかかわらず具象画としての鑑賞が可能である、つまり、三角形や円の組み合わせによって構成されているため、見方次第では山や太陽などの具体的なオブジェを読み取ることができると述べている。筆者が抽象画を選択する時の条件も同様のことが言える。元永定正は抽象画家でありながら基底線があり、円というフォルムを使用し、色彩においても鮮やかであることから、SD法という印象を問うことにおいても、「お話作り」をするということにおいても呈示する絵刺激として相応しいと判断した。プレテストとして6名の学生に施行した結果、成人の研究に十分使用可能と判断した。今後、幅広く世代間の比較研究をすすめる際の資料を得ることができることの見通しのもとに、今回の研究に用いることにした。話の内容が一般に広く流布していない絵本のページを選んだ理由は、物語の内容が対象者の反応に影響しないよう配慮したためである。（資料1・資料2）。

(3) 4つの絵刺激それぞれの印象を測定するためのSD尺度の作成

4つの絵刺激それぞれに対し、対象者がどのような感じを受けるかについて評定してもらうため、岡田・井上（前出）が絵画評価にふさわしいとした形容詞対を参考に12対の形容詞対「好き－嫌い、快い－不快、厳しい－優しい、広い－狭い、弱々しい－力強い、穏やかな－激しい、暗い－明るい、おとなしい－活発な、堅い－柔らかい、あたたかい－冷たい、悲しい－嬉しい、楽しい－つまらない」を選び、そのうえで7段階のSD尺度を作成した。その際、意味的にみて一般に望ましいと思われる形容詞と望ましくない形容詞が左右ランダムになるように配慮した（資料1に例示）。

(4) 手続き

中高年に対する調査は平成23年9月26日～28日の期間に某大学教養講座において実施した。会場の全員に資料1と資料2を配付。最初に資料1（A4の用紙に絵刺激として選んだ4つのカラーの絵（Ⅰ～Ⅳ）を左側に、お話を文章で記入する枠を絵の位置と対応させて右側に設けた調査用

紙）を手にとってもらい、4つの絵に対応させながら1つのストーリーとしてまとまったお話を作り、文章として枠内に記入してもらうことを求めた。それが終わったところで、資料2（4枚のSD尺度を綴ったもの）を手にとってもらい、資料1の絵を順に見ながら、それぞれどんな印象を受けたかSD尺度上で評定してもらった。

学生に対しては、平成23年9月20日～22日の期間において、大学の授業の一環として、上記と同様の手続きで調査を実施した。

2. 結果

抽象画に対して作られたお話の内容分析や中高年と学生を比較した結果については他の機会に報告を予定している。今回はお話の内容を規定したと思われる、各絵刺激に対する両者の印象や感覚の違いについて報告する。

(1) 4つの絵刺激に対する印象の得点化と因子分析

成人一般（学生・中高年）が呈示された抽象画に対してどのような印象を持つかについてSD尺度の個々の項目を検討する前に、それら項目の背景に印象の枠組み（絵を見ての印象の因子）が潜在する可能性について検討してみた。そのため、4つの絵に対する印象をSD尺度12項目で評定したものの点数化を行った（項目ごとに1点～7点を配分。望ましい印象を与える形容詞の側に5～7点を配した）。そのうえで、それぞれの絵ごとに学生と中高年両群のSD得点をまとめて探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い、.40以上の負荷量をもつ因子を抽出した（Table1～Table4）。

結果として絵画No.Ⅰに関しては2つの因子が抽出された。2つの因子間の相関は低く、お互いに独立した因子と言える。岡田・井上（前出）が絵画鑑賞の因子構造について7つの研究を論文上でまとめていることから、それらを参考にしつつ因子の命名を試みた。第一因子は絵の持つ雰囲気ないし空気感を表わす言葉が多いことから「空気感の因子」と命名。また第二因子の上位2項目は「嬉しい・楽しい」など、絵を見る側の情動が深く関与するニュアンスがあり、「感情移入の因子」と命名する。絵画No.Ⅱに関しては4つの因子が抽出された。第一因子と第四因子の関係を除けば、因子間には一定の相関関係が認められる。第一因子は負荷量が上位3項目の形容詞対の意味を踏まえ「活動性の因子」と命名する。第二因子は検討の結果、今回命名を保留。第三因子はNo.1の絵の第二因子と形容詞が重なることから「感情移入の因子」と命名する。第四因子は絵画No.Ⅰの第一因子（空気感の因子）と負荷量上位の2項目が

重なるが、絵画No.1と異なり第三因子（感情移入の因子）と相関があることから、空気感の因子とせず負荷量の最も高い形容詞に着目し「質感の因子」と命名した。絵画No.IIIに関しては2つの因子が抽出された。第一因子は好き嫌いに関する形容詞が多いことから「好悪の因子」と命名する。

第二因子は絵画No.2の第一因子と上位3項目が重なることから「活動性の因子」と命名。絵画No.IVに関しては大きな一つの因子のみ抽出された。形容詞対のマイナス・イメージ側には「縮小」のニュアンスがあることから、プラス・イメージの意味をふくめて「広がり」の因子」と命名した。

Table1 【抽象画 I】成人（学生と中高年）のSD尺度得点の因子分析結果

<Promax 回転後の因子パターンと因子相関>

	I	II
第一因子 ($\alpha = 0.835$)		
穏やかな・激しい	0.778	-0.080
柔らかい・堅い	0.771	-0.177
優しい・厳しい	0.748	0.202
広い・狭い	0.694	0.177
あたたかい・冷たい	0.616	0.102
第二因子 ($\alpha = 0.650$)		
嬉しい・悲しい	0.117	0.722
楽しい・つまらない	0.225	0.602
明るい・暗い	-0.057	0.561
活発な・おとなしい	-0.462	0.504
寄与率	32.22	17.28
因子間相関	I	II
I	-	-0.098
II		-

Table2 【抽象画 II】成人（学生と中高年）のSD尺度得点の因子分析結果

<Promax 回転後の因子パターンと因子相関>

	I	II	III	IV
第一因子 ($\alpha = 0.898$)				
明るい・暗い	0.891	0.061	-0.039	0.040
力強い・弱々しい	0.872	0.118	-0.155	-0.059
活発な・おとなしい	0.782	-0.126	0.052	0.072
あたたかい・冷たい	0.770	0.028	0.074	-0.096
第二因子 ($\alpha = 0.792$)				
優しい・厳しい	0.013	0.876	-0.019	0.036
快い・不快	0.069	0.707	0.085	-0.016
第三因子 ($\alpha = 0.812$)				
嬉しい・悲しい	-0.148	0.055	0.958	-0.163
楽しい・つまらない	0.296	-0.035	0.627	0.250
第四因子 ($\alpha = 0.680$)				
柔らかい・堅い	0.135	-0.052	-0.076	0.850
穏やかな・激しい	-0.355	0.136	-0.018	0.653
寄与率	38.16	20.17	7.23	4.34
因子間相関	I	II	III	IV
I	-	0.307	0.479	-0.048
II		-	0.412	0.515
III			-	0.421
IV				-

Table3【抽象画Ⅲ】成人（学生と中高年）のSD尺度得点の因子分析結果
 <Promax 回転後の因子パターンと因子相関>

	I	II
第一因子 ($\alpha = 0.844$)		
嬉しい・悲しい	0.845	-0.155
快い・不快	0.816	-0.002
優しい・厳しい	0.782	-0.092
好き・嫌い	0.606	0.222
楽しい・つまらない	0.504	0.359
柔らかい・堅い	0.502	-0.176
あたたかい・冷たい	0.481	0.260
第二因子 ($\alpha = 0.795$)		
力強い・弱々しい	-0.250	0.894
活発な・おとなしい	-0.071	0.822
明るい・暗い	0.193	0.633
寄与率	36.72	17.05
因子間相関	I	II
	I	0.234
	II	-

Table4【抽象画Ⅳ】成人（学生と中高年）のSD尺度得点の因子分析結果
 <Promax 回転後の因子パターンと因子相関>

	I
第一因子 ($\alpha = 0.867$)	
明るい・暗い	0.933
あたたかい・冷たい	0.910
広い・狭い	0.766
活発な・おとなしい	0.550
寄与率	64.71
因子間相関	I
	I
	-

(2) 因子別に見たSD得点の世代間比較

4つの絵に関して、学生および中高年それぞれの項目別SD得点を因子別に比較し、両者の差に関してt検定を行った(Table5～Table8)。さらにSD得点をプロフィールとしても表示する(Figure1～Figure4)。プロフィール化に際しては、解釈時における煩雑さを避けるため、一般に望ましいと考えられる形容詞を全て左側に配置し直した(逆転させた形容詞対の得点を修正している)。学生・中高年両者の因子別項目ごとの平均値(SD)をTable1からTable4に示す。

絵画No.Ⅱについても第一因子(活動性の因子)に関わる4項目の両群間には全て1%水準の有意差があり、学生の得点が高い。第二因子と第三因子の得点には有意差が認められなかった。プロフィール上も共に4点前後(「どちらとも

いえない」付近)で接近した値となっている。第四因子は2つの項目のうち「穏やかな-激しい」に1%水準の有意差が認められた。なお、この項目は中高年の方が高くなっている。絵画No.Ⅲの第一因子(好悪の因子)を構成する7項目は両群とも3点～5点の間に収まっており、プロフィール上での振幅が小さい。ただし以下の項目「うれしい-悲しい(1%水準で中高年が高い)」・「楽しい-つまらない(5%水準で学生が高い)」・「柔らかい-堅い(1%水準で中高年が高い)」・「あたたかい-冷たい(1%水準で学生が高い)」には上記の有意差が認められた。第二因子の3項目は全て学生群が有意に高い(1%水準)。プロフィールについては中高年のプロフィールを望ましい形容詞の方向に平行移動したようなパターンとなっている。絵画No.ⅣのSD得点は

寄与率 64.7%の1つの大きな因子（広がり因子）で括られている。この因子を構成する4つの項目（明るい-暗い、あたたかい-冷たい、広い-狭い、活発な-おとなしい）については全て学生群が有意に高い得点となっている。全体を通して延べ23項目中18項目は学生の得点が高いという結果になった。

学生・中高年間で有意差があり、学生側の得点が高く得点差も大きい項目を多く含む因子は「空気感の因子、活動性の因子、広がり因子」などである。有意差の有無を保

留して得点差の小さかった因子は、絵画No.Ⅱの第二因子（命名保留）、第三因子（感情移入の因子）、絵画No.Ⅲの第一因子（好悪の因子）などである。これらの因子については学生・中高年両群に違いが生じにくい。また他の角度から有意差の多く出た項目に着目して延べ数で拾ってみると「あたたかい-冷たい（4）、明るい-暗い（4）、活発な-おとなしい（4）」などがあげられる。これらの項目は学生と中高年の絵に対する印象の違いを際立たせる項目と言える。

Table5 【抽象画Ⅰ】 因子別各項目の平均値と標準偏差及び t 検定の結果

第一因子	学生 (N=61)	中高年 (N=55)	t 値
穏やかな・激しい	6.11 (0.91)	3.96 (1.34)	10.11**
柔らかい・堅い	5.70 (0.96)	3.38 (1.15)	11.78**
優しい・厳しい	5.90 (0.87)	4.71 (1.05)	6.69**
広い・狭い	6.20 (0.89)	5.02 (0.98)	6.75**
あたたかい・冷たい	5.68 (1.13)	4.49 (1.25)	5.39**
第二因子			
嬉しい・悲しい	4.35 (0.95)	4.67 (1.20)	-1.60
楽しい・つまらない	4.27 (0.94)	4.15 (0.98)	0.66
明るい・暗い	4.75 (1.15)	5.22 (0.79)	-2.51*
活発な・おとなしい	2.51 (1.36)	4.54 (1.16)	-8.54**

() 内は標準偏差

* p<.05 ** p<.01

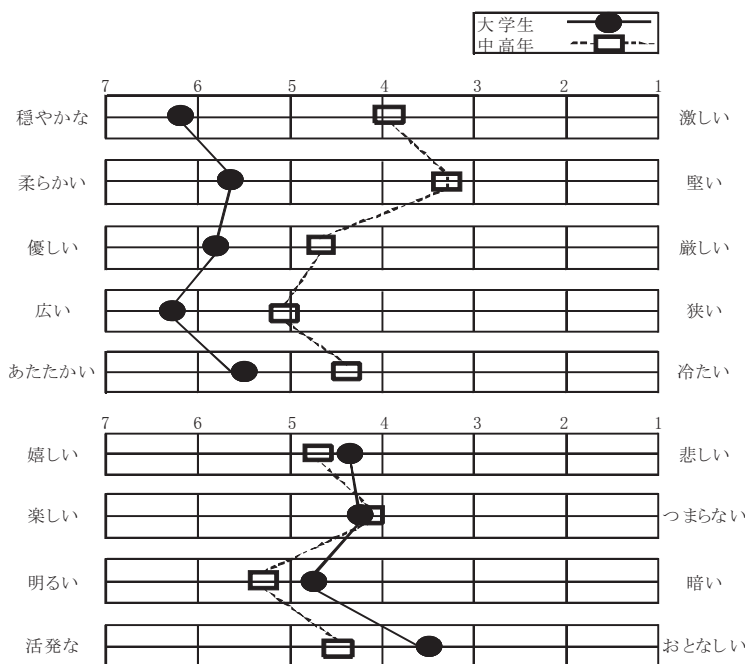


Figure1 【抽象画Ⅰ】 因子別各項目の平均値に基づくプロフィール

Table6

【抽象画Ⅱ】 因子別各項目の平均値と標準偏差及び t 検定の結果

第一因子	学生 (N=61)	中高年 (N=55)	t 値
明るい・暗い	5.37 (1.16)	3.76 (1.20)	7.27**
力強い・弱々しい	5.89 (1.23)	3.77 (1.30)	8.93**
活発な・おとなしい	5.66 (1.41)	4.22 (1.13)	6.00**
あたたかい・冷たい	5.56 (1.06)	3.75 (1.09)	9.07**
第二因子			
優しい・厳しい	3.98 (1.27)	3.89 (1.20)	0.40
快い・不快	4.07 (1.19)	3.96 (1.26)	0.45
第三因子			
嬉しい・悲しい	4.54 (1.23)	4.47 (1.14)	0.31
楽しい・つまらない	4.69 (1.40)	4.24 (1.10)	1.92
第四因子			
柔らかい・堅い	3.97 (1.72)	4.31 (1.17)	-1.24
穏やかな・激しい	3.49 (1.53)	4.95 (0.99)	-5.99**

() 内は標準偏差

* p<.05 ** p<.01

Table7

【抽象画Ⅲ】 因子別各項目の平均値と標準偏差及び t 検定の結果

第一因子	学生 (N=61)	中高年 (N=55)	t 値
嬉しい・悲しい	3.98 (1.55)	4.67 (1.06)	-2.76**
快い・不快	4.15 (1.34)	4.27 (1.24)	-0.52
優しい・厳しい	3.79 (1.18)	4.13 (1.23)	-1.52
好き・嫌い	4.56 (1.51)	4.07 (1.29)	1.85
楽しい・つまらない	4.82 (1.33)	4.29 (1.30)	2.14*
柔らかい・堅い	4.07 (1.47)	4.80 (1.16)	-2.96**
あたたかい・冷たい	4.80 (1.49)	3.85 (1.06)	3.91**
第二因子			
力強い・弱々しい	5.95 (1.20)	3.98 (1.24)	8.68**
活発な・おとなしい	6.05 (1.09)	4.46 (1.22)	7.36**
明るい・暗い	4.95 (1.47)	3.57 (1.24)	5.40**

() 内は標準偏差

* p<.05 ** p<.01

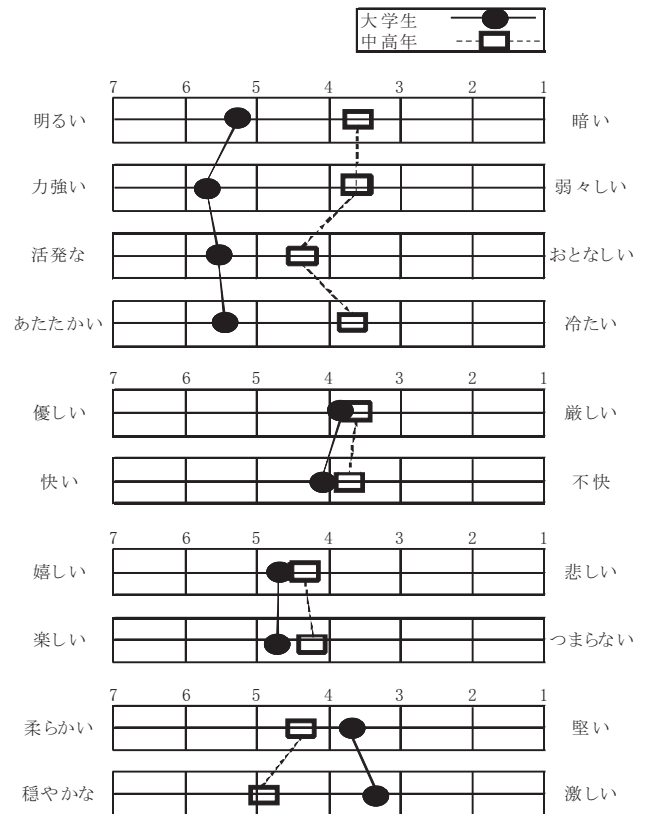


Figure2

【抽象画Ⅱ】 因子別各項目の平均値に基づくプロフィール

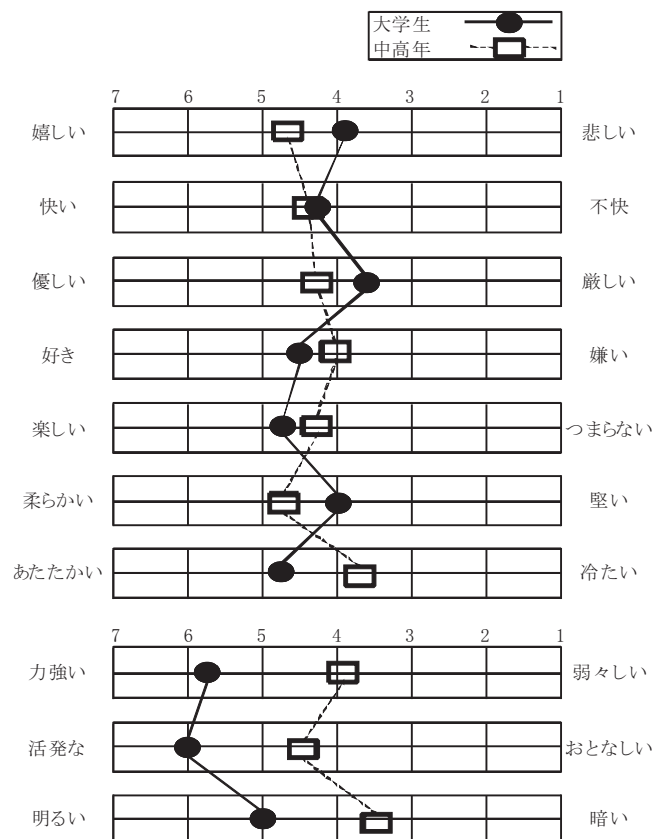


Figure3

【抽象画Ⅲ】 因子別各項目の平均値に基づくプロフィール

Table8 【抽象画Ⅳ】 因子別各項目の平均値と標準偏差及び t 検定の結果

第一因子	学生 (N=61)	中高年 (N=55)	t 値
明るい・暗い	6.33 (1.22)	3.51 (1.27)	12.16**
あたたかい・冷たい	6.38 (0.99)	3.96 (0.90)	13.70**
広い・狭い	5.92 (1.38)	3.63 (1.03)	9.95**
活発な・おとなしい	6.05 (1.33)	4.81 (1.24)	5.10**

() 内は標準偏差
* p<.05 ** p<.01

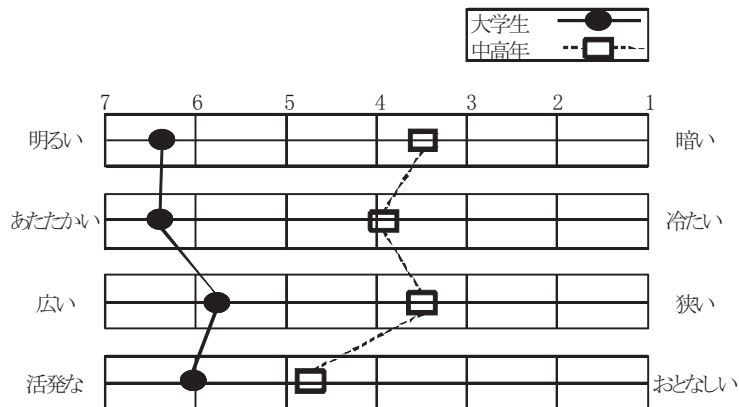


Figure4 【抽象画Ⅳ】 因子別各項目の平均値に基づくプロフィール

3. 考察および今後の課題

今回、調査対象とした学生群は中高年に対して青年期の世代を代表させている。中高年と学生は、ともに呈示された4つの抽象画に対し、SD尺度の比較的多くの項目で意味的に望ましい形容詞の側で評定の得点をつけている(延べ数で71.2%が4点以上)。両者とも呈示の抽象画全体に良い印象をもったということであろう。中高年と学生による評定の平均点を因子別にSD尺度上でプロフィールとして描いてみると、4つの絵に対する得点のプロフィールは重なり合うか、平行移動させたようなパターンを示すものが多かった。このことは、呈示された各絵刺激に対し一部の印象を除いて両者が基本的に同じような印象をもったことを意味している。ただし、学生群はいくつかの領域で形容詞対のプラス・イメージ側にシフトする傾向が認められる。特に「空気感の因子、広がり感の因子、活動性の因子」等を構成する項目のSD得点の高さからみて、抽象画の雰囲気、広がり感、活動感・躍動感に敏感に反応していることが示唆される。このようなものへの感受性は現代の若者の特徴を示しているように筆者には思える。

一方、中高年の得点は4点(どちらもいえない)をほぼ中心にして3点(やや)～5点(やや)の間にほとんど

が収まっている。例外は絵画No.Ⅰの項目「明るい-暗い(感情移入の因子)」で中高年の得点が5.22(0.79)と唯一5点を超えるとともに学生の得点以上に明るい側にシフトしていることである(5%有意)。なお絵画No.Ⅰの「感情移入の因子」についてはプロフィール上も中高年の得点が4点以上で、かつ学生の得点を上回る傾向が認められる。他にも中高年の得点が学生の得点を有意に上回る項目がある。絵画No.Ⅱの「穏やかな-激しい(質感の因子)」、絵画No.Ⅲの「好悪の因子」における「嬉しい-悲しい(1%有意)、柔らかい-堅い(1%有意)」などである。絵を見る側の感情や情動を触発するような印象群については学生など青年期の世代と変わりがないか、もしくはより敏感に反応している可能性を示唆しており、今後の研究課題としたい。

結果の全体を通してみると、中高年の場合は絵刺激の特徴に対して学生ほどの反応を見せていない。学生には絵の雰囲気や躍動感などに敏感に反応する傾向が認められる。この結果を生じた要因の一つとしては加齢による感性の変化が考えられる。

しかしその一方で、快・不快、好悪といったより「本能的」な感情を誘発する印象群にはあまり差が認められないことから、学生群は表面的な情緒に反応しやすいという解

積が可能とも言える。生涯教育との関連で言えば、青年に与える教材などは雰囲気配慮する必要がある一方、中高年にはより原初的情緒を触発する印象が浸透しやすいと考えられる。今回の研究を生涯学習の視点からどのようにとらえることができるかを考えてみると、若者は批判力と行動力があるが経験不足で人生や時代の移り変わりが見えない分、中高年は過去を全体的に振り返り、肯定的・妥協的に人生を受容する知恵をもつが、現役として変革しようというエネルギーが不足している（山田，1992）と述べているが、今回の結果にも示されているように、若者との共通部分、例えば、本能的な感情を誘発する部分などの視点は年代の差を越えた他者理解として大きな収穫であったと思われる。その他にも、共通する部分、異質であろうと思われる部分を数多く発見し、沢山の示唆を得た。今後は、呈示する絵の作者や内容を変えて今後確認したい研究課題である。また今回の調査対象者はいずれも女性に限定している。成人男性を対象として性差についても検討したいと考えている。さらに、「お話作り」の分析から使用語彙の多少、内容の差異等の検討を行い、世代間の比較もしていく予定である。

謝辞

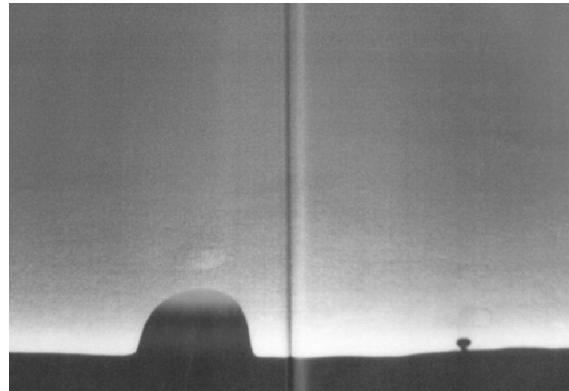
本稿執筆にあたり、御協力いただきました学生および中高年の方々に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 榎本博明 高齢者の心理 季刊家計経済研究 70 2006 pp.28-37
- 2) 上村有平 生涯発達の観点からみた現代教育へのエリクソン理論の示唆 心理科学 30 2009 pp.20-30
- 3) 松岡弥玲 理想自己の生涯発達—変化の意味と調節過程をとらえる— 教育心理学的研究 54 2006 pp.45-54
- 4) 岡田守弘・井上 純 絵画鑑賞における芸術性評価要素に関する心理学的分析 横浜国立大学教育紀要 31 1991-10-31 pp.45-66
- 5) 佐藤真一 年齢アイデンティティのコホート差, 性差, および規定要因: 生涯発達の視点から 発達心理学研究 8 1997 pp.88-97
- 6) 清水美生・川畑摩紀枝・石川雄一・矢田真美子・松田宣子・宮脇郁子・津田紀子・土肥加津子・矢本美子・野崎香野・村木敏明・長尾徹・米田稔彦・瀬藤及理子 自然災害後の高齢者の心理的变化—阪神・淡路大震災の高齢者のリソースの喪失状況— 神戸大学医学部保健紀要 14 1998 pp.11-16
- 7) 下仲順子 老人における不安の特性 老年心理学研究 6 1980 pp.61-72
- 8) 下仲順子編 老年心理学 培風館 1997
- 9) 鈴木征男 長寿地域高齢者の心理的特性—性格5因子モデルによる比較研究— 心身医 40 2000 pp.525-532
- 10) 鈴木忠 「希望」の原理と生涯発達 E. ブロッホと E.H. エリクソンをもとに 白百合女子大学研究紀要 46 2010 pp.93-115
- 11) 高橋かほる 幼児の接続語使用に関する研究 聖徳大学大学院修士論文 2011
- 12) 竹中星郎・星薫編著 老年期の心理と病気 放送大学教育振興会 2002
- 13) 山田洋子 なぜ中年の心理発達なのか 日本教育心理学会 34 1992 -08-25
- 14) 若本純子 中高年期の自己評価における発達の特徴—自尊感情との関連, および領域間の関連に注目して パーソナリティ研究 16 2007 1 pp.1-12

資料 1

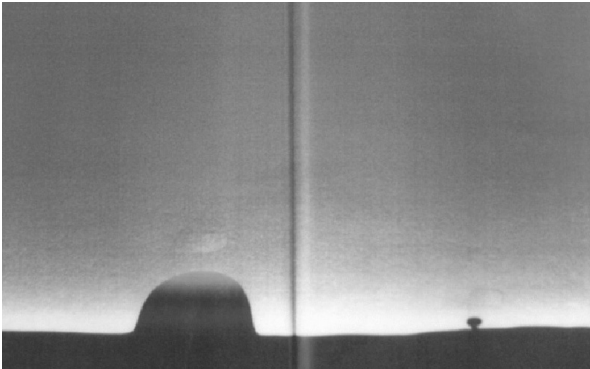
1. 次の絵を見て、思い浮かんだイメージに近いところの項目に○印を1つ、つけてください。



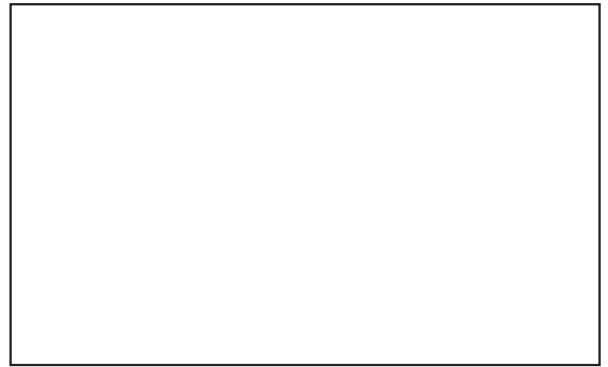
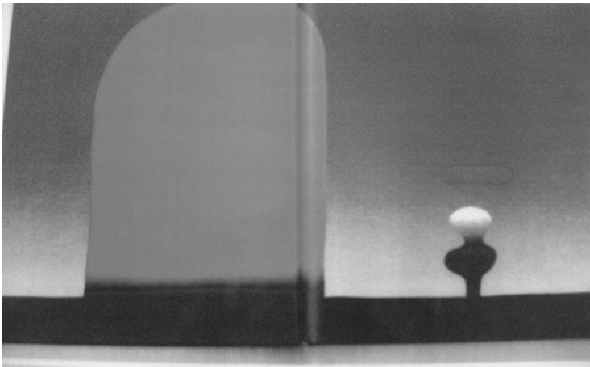
	非常に	かなり	やや	どちらとも いえない	やや	かなり	非常に	
好き								嫌い
快い								不快
厳しい								優しい
広い								狭い
弱々しい								力強い
穏やかな								激しい
暗い								明るい
おとなしい								活発な
堅い								柔らかい
あたたかい								冷たい
悲しい								嬉しい
楽しい								つまらない

下記の絵 1～4 を見て、上から順番に続けて、お話を作ってください。

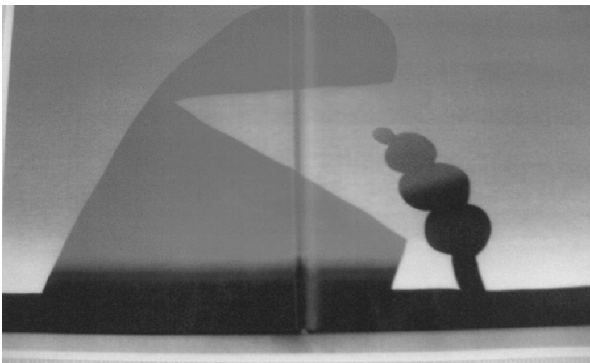
1.



2.



3.



4.

